

## キリシタン時代の日本の音楽実践の様子 ——フロイス『日本史』の記述の考察を通して

山上千乃 愛知県立芸術大学音楽学部作曲専攻（音楽学コース）

### 要旨

ルイス・フロイス Luís Fróis（1532-1597）はポルトガル生まれのイエズス会の宣教師で、1563年に日本での宣教活動を始めた。彼は宣教活動だけでなく、書翰の写しを各布教地に送付する仕事や書記の仕事もしていたため、文筆家としての評価も高い。フロイスの主な著作は、『日欧文化比較』や『日本史』（以下「フロイス『日本史』」と表記）である。フロイス『日本史』は日本布教史をまとめるものとして、1583年から94年にかけて書かれた。本論文では、フロイス『日本史』における音楽の記述を考察することを通して、キリシタン時代の日本の音楽実践の様子を明らかにしていくことを目的とする。

フロイス『日本史』を扱う先行研究は、宗教や祭礼、建築や庭園、女性の地位、『日本史』の写本、その史料価値についてなど多岐にわたっているが、音楽についての先行研究は見られない。一方、キリシタン時代（キリスト教伝来の1549年から徳川幕府の禁教令が出る1614年まで）の音楽は「キリシタン音楽」とよばれ、盛んに研究が行われてきた。当時の数少ない史料をもとにした曲や音の推測、音楽教育や音楽実践を明らかにする研究などがなされてきた。そこで本研究では、フロイス『日本史』を音楽の面からアプローチし、キリシタン時代の日本の音楽実践の様子を明らかにすることを試みる。

本論文は全2章から構成されている。

第1章では、フロイスの生涯とフロイス『日本史』の概要について述べた。第1節ではフロイスの生涯を概観し、彼のイエズス会での活躍や他のイエズス会士からの評価などを取り上げた。そこから、フロイスは宣教師としても文筆家としても高く評価されており、イエズス会の日本での活動を複数の面から支えた人物であったことがわかった。第2節では、フロイス『日本史』の構成や原本の状態、邦訳本の出版などについて述べた。フロイス『日本史』の原本は焼失しているものの、写本はいくつかの種類が存在する。また、邦訳本出版に

において訳者が独自のテーマごとに構成したため、訳本と写本の見比べが難しくなっているという問題点があった。

第2章では、フロイス『日本史』から音楽に関する記述を抜き出し、内容を考察し、音楽実践の様子を明らかにしていった。第1節では、日本宣教における音楽の使用について述べた。聖祭での音楽の使用だけでなく、教会の外でも大人や子どものキリシタンが聖歌を歌っていた。多くの場所で子どもの歌う様子が記述されており、子どもの存在は異教徒の感化や大人のキリシタンの信仰心の深化にも影響を与えたと考えられる。さらには大名や領主も改宗し、教会音楽にふれ、領民たちの信仰を保護していた。大名が改宗すると領民も改宗するので、イエズス会にとって大名は重要な存在であったと考えられる。また、イエズス会によって設置された神学校では、高度な教育が行われていた。その中に音楽もあり、立派な聖歌隊による歌やミサ仕えの演奏もできていたことがわかった。第2節では、宣教師から見た日本の音楽について述べた。祭りの音楽や念仏、梵鐘などについて詳細に記述されており、良い印象、悪い印象の両方が見られた。また、仏教徒とキリシタンの宗教的対立も見られた。他にも、改宗した琵琶法師が説教や琵琶の演奏などで、宣教活動において重要な役割を果たしていたことがわかった。イエズス会は日本宣教において、日本の音楽を戦略的に使用していたと考えられる。第3節では、外国の音楽や外国での音楽の使用について述べた。当時日本で数少ないが、西洋以外の外国の音楽が聴かれたことがわかった。

本論文では、フロイス『日本史』の記録がある1549年から93年までしか取り上げることができず、キリシタン弾圧の過程での音楽について深く見ることはできなかった。しかしながら、1587年の伴天連追放令以後も、神学校では音楽教育の精度が上がっていたことがわかった。よってキリシタン弾圧下でも、日本において西洋音楽の演奏が行われていたといえる。また、フロイス『日本史』では、様々な種類の音楽の記述を多く見ることができた。フロイスの詳らかな記録や率直な感想など、フロイス『日本史』にしか見られない記述もあった。本研究を通して、フロイス『日本史』を音楽という新しい面からアプローチすることができたと考えている。